

アッラーへ至る道における二人の女性

——ジャーミーの『ユースフとゾレイハー』にみる 二女性の運命——

松 本 耿 郎

1. イスラームの修行者

イスラームは多様な文化を持っている。共同体の規範としてイスラームを理解している人々がいる一方で、イスラームの教えの総体を人間完成の方法と捉え、人間完成の最高段階をアッラー、すなわち唯一の真実在者、森羅万象の創造主の本質の「認識」とみなしているイスラーム教徒（ムスリム、Muslim）たちがいる。この場合の「認識」は全人格的な認識を意味している。彼ら彼女らはイスラームの教の信仰内容と儀礼と規定のすべてが自らをムスリムとしての人間完成、すなわち真実在者の全人格的認識に導くための道とみなしているのである。そういうイスラーム教徒はイスラームのなかの特定の教派を形成しているわけではなく、スンニー派、シーア派の別を超えてイスラーム社会に広く存在する。そういうムスリムたちは預言者ムハンマドに学び、その行いを真似て預言者に近づこうとする。そうすることが唯一の真実在者に到達する道であると考えているのである。

このようなムスリムたちは、自らを真実在者に向かって旅する旅人とみなしている。彼ら、彼女らはアッラーへの旅人 (sālik ila Allāh) あるいはアッラー

への旅行者 (sā'ir ila Allāh) などと呼ばれている。このような真実在者の認識を目指す修行の旅をペルシャ語文化圏⁽¹⁾ではセイル・オ・スルーク (sayr o sulūk 精神的巡歴旅行) と呼んでいる。さまざまのかたちでこのセイル・オ・スルークに従事するムスリムがいるのだが、それらの一部には所謂スーフィー修行者 (ahl al-taṣawwuf) と呼ばれる人々もいる。

ところで、このアッラーへ向かう旅は幾つかの段階に区切られて説明されている。その段階の設定のしかたは修行者によってそれぞれ異なる。数多くの段階を考えている人もいれば、段階の一つ一つを他の区分法では幾つもの段階に分けられているものを一まとめにしたためにさほど段階の数を多く設定していない人もいる。ハージェ・アブドッラー・アンサーリー Khwajah 'Abd Allāh Anṣārī (1005-1088)⁽²⁾はその著『旅人の宿駅』*Manāzil al-sā'irin* においては九十六の段階を設けている。これ以外にも発心からアッラーへ到達する旅程を百に区切る書物もあれば、もっと区切りの数の少ないものもある。アッラーに近づき、アッラーに到達しようと決意した霊的旅人がアッラーに向かって進む旅を修行者たちは「アッラーへの旅」sayr ila Allāh あるいは sayr ila al-Ḥaqq (すなわち真理へのたび) と名付けている。「アッラーへの旅」を完了した修行者は、次いで「アッラーの中の旅」をする。こうすることでアッラーの本質を知悉することができる。「アッラーの中の旅」を完了した後に修行者はアッラーから経験的世界に帰り、経験的世界をアッラーと共に旅をする。このようにし

(1) 小アジア半島を含む西アジア、北インド、中央アジアをひとまとめにした地域をいう。

(2) ハージェ・アブドッラー・アンサーリーはセルジューク朝時代のハンバル派の法学者であるがムスリムの人間完成のための方法について思索を深め、この人間完成法方についての著作を数多く残している。『旅人の宿駅』*Manāzil al-sā'irin* は彼の代表作である。現在もっとも広く流布しているテキストは石版本オフセット印刷で、カマルッディーン・アブドッラザーク・アル・カーシャニーの注釈を欄外注として本文とともに印刷されている Kitābkhāne-'elmiyyeh Ḥamidi, イラン暦1354年出版のものである。なおこのテキストにはサドルッディーン・ゴニヤウィーの『聖句の書』*Kitāb al-nuṣūṣ* が含まれている。

てアッラーと共にこの経験的世界を旅する旅を *sayr ma'a Allāh min Allāh ila al-khalq* (アッラーから被造物に向かいアッラーとともにする旅) あるいは *sayr ma'a al-Haqq min al-Haqq ila al-khalq* (真理から被造物に向かい真理とともにする旅) と呼ぶ。かくして真実在の全人格的認識を達成した修行者が真実在者すなわちアッラーと共に被造物世界を旅する、あるいはそこに生活するとき、聖なる伝承 (Ḥadīth qudsī) 「我は (アッラーは) 彼の (修行者の) 聴覚, 視力, 手, 舌となり, 彼は我により聞き, 我により見て, 我により打ち, 我により語る」⁽³⁾ に示される人間となると考えられている。

ところで、この「聖なる伝承」に示されるムスリムにとっての理想の人間、もしくは完成された人間の段階に到達することはアッラーに至るために設定された全過程を長い時間をかけて一つ一つ終了すれば必ず可能になるというものでもないのである。アッラーに到達するために定められたあらゆる修行過程を完了したからといって、それで自動的にアッラーに到達するという訳ではないのである。すなわち、人間の努力だけで人間的完成が達成できるというものではないのである。修行の全行程を終了しさえすればアッラーの中へと入り込むことができるのではない。むしろ、アッラーに近づいたところでアッラーの側からの「招き寄せ」 *Jadhbah* があって始めて最終目的に到達できるのである。このアッラーの「招き寄せ」は修行の最終段階で発生するとも限らないのである。おもしろいのは、修行の初期段階で幸運にもアッラーの「招き寄せ」を経験する修行者もある。また長年の修行にもかかわらず、この「招き寄せ」を経験することなく一生を終える修行者もいるのである。それはそれで長期にわたって心の浄化に努力をしたわけであるから功德を積んだことになる。

(3) この「聖なる伝承」すなわちアッラーが直接人に語りかけた言葉の記はおびただしい数のスーフィー関係の文献に見出すことが出来る。例えば、Aziz Nasafi: *Kitāb al-Insān al-Kāmil*, ed., Marijan Molé, Teheran, Departement D'Iranologie de L'Institut Franco-Iranien, 1962, p.136参照。

ともかくこの「招き寄せ」という考え方について、ペルシャ神秘思想の要綱を韻文で表した14世紀のシャベスタリー（1320没）の『玄秘の花園』 *Gulshan-i Rāz* の注釈者シャイフ・ムハンマド・ラーヒジー（1516没）はその注釈の中で、「[招き寄せ]とは純然たる永遠の神慮によりアッラーの僕（修行者）を真理に近づけ、アッラーの僕が努力することなしに修行の諸段階を通過する時に必要とするものをアッラーが準備してくれることをいう。これは預言者や神の友の道である」⁽⁴⁾と述べている。

アッラーは「招き寄せ」によりアッラーの僕、すなわち人間の側からの努力をまたずに人間をアッラーの内なる旅へと誘い込み、そこから経験世界へアッラーとともに赴き、経験世界においては完成された人間として生きさせるのである。これは長年かかって修行過程を一段階、一段階とアッラーに向かって進んでゆく修行者に比べて非常に労力の節約になる。このように真実在者へ一気に跳躍することは、その背景がおおいに異なりはするが禅宗における「頓悟」と「漸悟」の違いを想起させる。アッラーの「招き寄せ」による予期せぬ真実在の認識の達成はある種の頓悟ともいえるであろう。禅宗の頓悟はイスラームの修行における「招き寄せ」とは根本的にことなる文脈のなかにあるから比較はなかなかできない。しかし、現象的には共通した点があるといえるであろう。

ところで、中世末期の西アジアの詩人哲学者アブドッラフマーン・ジャーミー 'Abd al-Rahmān Jāmī（以下ジャーミーとする）は所謂スーフィー修道会の一つナクシュバンド会⁽⁵⁾の一員として自ら真実在者の認識のための修行をするかたわら、数多くの文学作品を遺している。それらの作品の多くは前述のセ

(4) Muḥammad Lāhijī: “*Mafātiḥ al-i'jāz fī sharḥ Gulshan-i Rāz*”, ed. Keywān Samī'ī. Ketābfurūshī Mahmudi, Teheran. 1958. p.254

(5) ナクシュバンド会 Naqshbandiyyah はボハラ生まれの修行者 Bahā' al-Dīn Naqshband（西暦1389年没）により創設されたスーフィー修道会である。アッラーを黙想することを修行法の中心においている。

イル・オ・スルーク（精神的巡歴旅行）にかかわるものである。すなわち、このセイル・オ・スルークが成立する場としての宇宙の見取り図である存在界の構造を示す「存在一性論」にかんする論文、存在界の一員としての人間の様々の活動についての叙述、既存の「存在一性論」に関する注釈、セイル・オ・スルークに従事した修行者の事跡についての作品、セイル・オ・スルークにおいて守るべき倫理などについて作品を著している。

ジャーミーの『ユースフとゾレイハー』“*Yūsuf o Zoleykhā*”という叙事詩はそのようなセイル・オ・スルークの作品のひとつであるとみることができる。この長詩は彼の七つの叙事詩を含む叙事詩集『七つの玉座』“*Haft Awrang*”の第五の叙事詩である。ジャーミーはこの第五の叙事詩『ユースフとゾレイハー』においてこの「招き寄せ」を見事に描き出している。『ユースフとゾレイハー』は美少女ゾレイハーの恋愛冒険譚の叙事詩として受け止められている。しかしながらこの叙事詩を詳細に分析すると、それが単なる恋愛冒険譚ではなく深い宗教的内容をもつ叙事詩であることがわかる。

ジャーミーの『ユースフとゾレイハー』とは『コーラン』第十二章「ユースフ」に想を得て、彼が大幅に脚色をほどこした話になっている。この『コーラン』の「ユースフ」は『旧約聖書』創世記のヨセフ（ユースフ）の物語と内容的にかなりな部分が一致する。すなわち族長ヤコブの末息子ヨセフ（ユースフ）が兄たちに妬まれ、井戸に落とされたところを隊商に拾われてエジプトにつれてゆかれ奴隷にされるが、ファラオの夢解きをしたことで奴隷の境遇からファラオの大臣に取り立てられ、ヨセフ（ユースフ）が死んだと思い込み悲しみのあまり盲目になっていた父のヤコブと再会し、兄弟とも仲直りするという物語である。創世記においても『コーラン』においてもユースフ（ヨセフ）は大変な美青年とされている。創世記ではファラオの護衛兵隊長のポティファルの妻がヨセフに横恋慕するエピソードが創世記には挿入されている。『コーラ

ン』の十二章においても奴隷のユースフを置いている家の女主人がユースフを誘惑するエピソードが挿入されている。いずれにしても創世記にも『コーラン』においてもヨセフもしくはユースフを誘惑するエジプトの女性の実名は書かれていない。イスラーム世界では『コーラン』の注釈書類のなかにその女性がゾレイハーという名前であったことが記されている。しかし、創世記にせよ『コーラン』にせよ、ユースフ（ヨセフ）を誘惑するエジプトの貴婦人は淫蕩でふしだらな女性という印象を与える紹介のされかたをしている。これに対しジャーミーは『ユースフとゾレイハー』を書くにあたってゾレイハーの人間像を根本的に書き改めている。それまで中東世界に流布していた淫蕩でふしだらな女性というイメージをこの叙事詩のなかで一新しているのである。ゾレイハーはユースフに対する愛に忠実で、ユースフの愛を得ようとあらゆる努力を惜しむことのない、けな気で恋に憑かれた女性として描いている。ゾレイハーはユースフの愛を得ようとさまざまな試みをするが彼女が偶像崇拜をやめて一神教に目覚めるまでは失敗しつづけるのである。そこでこの叙事詩の荒筋をここにまず紹介しておくことにする。

2. 『ユースフとゾレイハー』の荒筋

ジャーミーの『ユースフとゾレイハー』において物語の主人公はユースフではなくゾレイハーである。ゾレイハーはマグレブ（今日のモロッコあたりを指す地理概念）⁽⁶⁾の王タイムースの娘とされている。ゾレイハーはジャーミーと同様に幼少より愛を求め、愛に生き、愛の導きに忠実に生きている人として描

(6) マグレブ maghrib は日没の地の意味で、東方（マシュレク、日の昇る地） mashriq に対応する言葉である。イスラーム神秘思想において東方、すなわちマシュレクは存在の根源の意味を与えられ、マグレブは存在の根源から遠く離れた場所という意味が与えられている。マグレブの住人はマシュレクを故郷と看做してそこに強い郷愁を覚えるとされる。ゾレイハーがマグレブに生まれたと設定されていることはマシュレクにたいする熱愛を宿命付けられた者であることが含意されている。マグレブに生まれたゾレイハーがマシュレクに向けて旅立つことは予定されていたことである。

かれている。ゾレイハーは幼児のころの人形遊びの際にも一対の人形にそれぞれ「愛する者 *āshiq*」と「愛される者 *ma'shūq*」という名前をつけて人形たちに愛の遊びさせていた⁽⁷⁾。幼くして愛に目覚めたゾレイハーは7歳の年のある夜に眠りの中に夢を見る。ゾレイハーはその夢の中に世にも希な美貌の青年の姿を見たのである。

形象を見る目はまどろむも、心のもう一つの目は目覚めていた。

突如、戸口から一人の青年が入ってきた。むしろ清らかな精霊と呼ぶべきか。

気高い体つきは光の国から来た如く、永遠の庭の天女さえも色あせる(美しさ)。⁽⁸⁾

ゾレイハーはこの人間の限界を超えた美しさを夢見てたちまちその青年を激しく恋い慕うようになる。しかしその美しい青年はどこの誰ともわからない。手がかりのないままに、ゾレイハーはこの夢に見た美しい青年に恋焦がれる。しかし、その青年の名も知らず、居所もわからず、まったく再会の目途もなく、ただゾレイハーは恋焦がれてやるせなさに涙するばかりであった。片思いの恋にやつれたゾレイハーに彼女の乳母は同情するがどうすることも出来ない。ゾレイハーの父タイムースもゾレイハーの悲しい恋に気づくがその心を癒す方法を知らない。その夢から一年後に彼女はその青年の二度目の夢を見る。ゾレイハーは青年に愛を告白し、名前と居所を教えて欲しいという。青年はゆくりなく自分もゾレイハーを愛していると告げる。この思いがけない愛の告白によりゾレイハーの青年への愛の感情はよりいっそう激しくなるが、この夢の再会においてもゾレイハーは青年の名前と居所を聞くことができなかった。それだけ

(7) Jāmī: “*Kulliyāt-Jāmi*”, ed. Modarres Gilāni, Teheran. H.1351, p.728.

(8) *ibid.*, p.604.

にゾレイハーはさらにいっそう青年を恋い慕うようになり、なかば錯乱状態に陥る。ゾレイハーは恋の激しさのために王宮のなかをさまよい、自傷行為にまで及ぶ。このために父親のタイムス王はゾレイハーの足を黄金の鎖で縛る。一年が過ぎる頃にその青年は三度ゾレイハーの夢に現れる。ゾレイハーは夢の中の青年に名前と居所を教えてくれるように懇願すると、青年が自分はエジプトの宰相であると告げる。そのころゾレイハーの美貌は世界中に知れ渡っていたので、多くの王侯貴顕からの求婚の使者が来ていた。しかしながら、求婚使者の群れの中にはエジプトからの求婚使者はいなかった。ゾレイハーの落胆と嘆きは大きかった。そこで父のタイムス王はエジプトの宰相に自分の使者を派遣し、娘のゾレイハーを妻に娶るように申し入れた。その宰相はアジーズという名前だった。宰相アジーズはこの申し出を喜んで受け入れ、ゾレイハーはアジーズと結婚する。しかし、アジーズはゾレイハーが夢に見た青年とはまったくの別人だった。ゾレイハーはまたしても激しく傷つき絶望するが、天使がゾレイハーを訪れアジーズの助けによらなければ夢に見た青年とは結ばれないと告げた。この天使のお告げに勇気づけられゾレイハーはアジーズの妻として暮らす。宰相の妻として贅を尽した生活であったが、それは名目上の妻であった。ゾレイハーは夜には自分の個室にとじこもり夢に見た青年を想い、その青年のまぼろしに一人で語りかけて過ごした。こうして数年が過ぎた。

ある日、カナーンから奴隷商人がエジプトに奴隷たちをつれてやってきた。奴隷たちのなかにユースフがいた。ユースフの超絶的な美しさはたちまちにしてエジプト中に広まった。だれもがこの美しい奴隷を欲しがったためにその値段は非常に高価なものとなっていた。

そのころエジプトにバーズィゲという名の美しい貴族の娘がいた。バーズィゲはユースフの噂を聞いて是非とも会いたいと思った。彼女がユースフを見るとあまりの美しさに気を失ってしまうほどであった。バーズィゲはユースフに一体どうしてこのように美しい容貌の青年が生まれたのか、どうしてそのよう

に美しい身体をもっているのかなどと、いろいろ質問をした。ユースフは、自分は唯一の創造主によってつくられた小さな存在に過ぎない、創造主の偉大さと美しさに比すれば自分取るに足りないものであると答えた。自分は森羅万象のなかの小さな儂い存在にしかすぎない、そういうものに執着することは空しいことであると教えた。そしてユースフはパーズィゲに森羅万象の根源である唯一の創造主に寄り縋ることが最善の道である事を教えた。ユースフの助言で全てを悟ったパーズィゲはユースフを諦め、ナイル川のほとりに小屋を立て、そこで自分の財産を貧しい人々にわけあたえ、窮民への奉仕と唯一の創造主の信仰に生きたのである。

一方、ユースフの居るところにはつねに人の輪ができた。たまたま外出したゾレイハーは群集の中にいるユースフを認め、彼こそが恋焦がれてきた青年であることを知る。ゾレイハーはユースフが奴隷市で競売に立つと、名目上の夫であるアジーズにユースフを競り落とすように懇願する。ユースフは美貌の青年であるために法外の値がついていたが、アジーズの所持金とゾレイハーの持参の宝飾品すべてをだしてユースフを競り落とす。ゾレイハーはユースフを屋敷に迎え入れ歓待する。ゾレイハーはユースフに愛を告白するが、ユースフは自分が買われた奴隷であるからゾレイハーの愛を素直に受け入れることが出来ないという、また主人のアジーズを裏切るようなことは出来ないという。

ゾレイハーはユースフが自分を求めるように仕向けるために乳母の進言により寺院を建てる。その寺院の一部屋はユースフとゾレイハーの接吻している絵や互いに抱擁しあう絵などが、どの壁面にもまた天井にも描かれていた。ゾレイハーはこの寺院にユースフを呼び寄せ、寺院を案内し、最後にかのユースフとゾレイハーが愛し合う絵のかかれた部屋に案内し、そこでユースフに自分の欲望を満たすように迫る。しかしながらそれでもユースフはゾレイハーの要求を受け入れない。ゾレイハーは自らの想いを遂げられない悲しみを胸に秘めながら、ひたすらユースフに献身的に奉仕する。ユースフへの想いが高じたゾレ

イハーはある日ユースフを屋敷の中の自室に彼を誘い入れ、ユースフに自分の愛の渴きを癒してくれるように迫った。ゾレイハーはユースフが自分の求めに答えてくれないなら、自分は死ぬと短剣を取り出してユースフを脅迫する。ユースフはそのような背徳の行いは許されないとゾレイハーを説得した。その時、ユースフはゾレイハーの部屋の一隅に安置される偶像に気づく。ユースフはゾレイハーに偶像崇拜が間違いであると諭し、偶像に汚された部屋から立ち去ろうとする。部屋から出てゆこうとするユースフを追いかけてゾレイハーはユースフの襦袢を後ろから引っ張る。ユースフの襦袢を無理にゾレイハーが引っ張ったためにユースフの襦袢の後ろが千切れてしまう。しかし、ユースフはそのまま出て行ってしまふ。部屋を出たところで主人の宰相アジーズと出くわす。ユースフとアジーズが連れ立って歩く様子を見たゾレイハーは自分の部屋で起こったことをユースフがアジーズに話し、自分のふしだらな行為が露見することを恐れた。そこでゾレイハーはアジーズにたいし嘘の話をする。それは自分が寝ているところへユースフが忍び込んできて、ユースフが自分を犯そうとしたというものである。ユースフはゾレイハーの話を根拠のない嘘であると説明するが、涙ながらにゾレイハーがアジーズに訴えたために、アジーズはユースフを牢屋に閉じ込めてしまう。ユースフはこの窮地から助けだされるように神に呼びかけた。神はユースフの呼びかけに答えて奇跡をおこす。ゾレイハーの侍女の生後三月の幼児が言葉を喋り、ユースフの襦袢の前が千切れているか後ろが千切れているかを調べるように、前が千切れていればゾレイハーがユースフに抵抗した証拠であり、後ろが千切れていればゾレイハーがユースフを誘惑した証拠だというのである。驚いたアジーズはユースフの襦袢を調べてみた。襦袢は後ろが千切れていた。アジーズはゾレイハーを厳しく叱責し、館から出て行くよういうが、ユースフがアジーズを諫めて穏便にことを収めた。しかしながら、この事件はエジプト中に広く知られることとなった。事件は尾に鱭がついて醜聞として広まっていった。ゾレイハーはこの事件を尾に鱭つけ

て言い立てる婦人たちに仕返しをしようとした。ゾレイハーは盛大な宴会を催し、ゴシップ好きの婦人たちを招待した。ゾレイハーは招待客の夫人たちに「あなた方は私がヘブライの奴隷に恋をしていると非難しておられるが、あなた方が実際に彼を見れば私がおの人に恋するのも至極当然のことと思われるでしょう」と言った。婦人たちはそれではその美男子を見せて欲しいといった。あの事件以来、ユースフはゾレイハーと交渉が途絶えていたが、ゾレイハーがユースフのもとを訪れて、前非を詫びて、自分が醜聞に苦しんでいるから、自分を助けるために宴会に出てくるように懇願する。出てきてくれないと自分が恥をかくとってユースフを口説き落とす。ゾレイハーはユースフに美しい衣服を着せ、宝石をちりばめたベルトをしめさせ、頭にはこれまた宝石に飾られた冠をいただきさせた。美しく装わせたユースフをゾレイハーが宴席に案内すると、招かれた夫人たちはユースフを見たときとたんには恍惚となってしまった。ユースフが宴席に来たときは、婦人たちがオレンジの皮をナイフで剥こうとするところだった。彼女たちはユースフの美しさに呆然自失してしまい、自分の指をナイフで切ってしまった。婦人たちはユースフがあまりにも美しいために、ゾレイハーがユースフに恋するのも当然だと思ふようになり、もう宰相夫人がヘブライの奴隷に道ならぬ恋をしているなどと言わなくなった。ゾレイハーは再びユースフを深く愛するようになった。しかしながら、ユースフはゾレイハーの愛に応えようとはしなかった。宰相のアジーズはゾレイハーがユースフへの愛に苦しんでいるのを見て、ユースフを再び牢屋に入れることにした。牢屋のユースフをゾレイハーは訪れ、自分の愛を受け入れてくれるように懇願するが、ユースフは拒絶し続ける。このため、ユースフは牢屋に留まり続けることになる。毎日、ゾレイハーは牢屋のユースフに会いにゆくがユースフの態度は変わらなかった。ゾレイハーは苦しみ、愛にやつれていった。ところがある夜のことである。エジプトのファラオが不思議な夢を見たのである。それは七頭の肥えた牝牛を七頭の瘠せた牝牛が食べてしまい、七つの青々とした

穂が七つの枯れしぼんだ穂に滅ぼされるというものだった。ファラオはこの夢の意味を家臣に尋ねたが誰一人として夢解きをできるものがいなかった。ある小姓が牢屋のユースフのもとへ行きこの夢の意味を訊ねた。ユースフは、それは七年の豊作と豊穰の年が続く、そのあとで七年の不作と飢饉の年が続くという意味であると説明した。この夢説きをその小姓がファラオに伝えたと、ファラオはユースフを宮殿につれてこさせた。ユースフはさらにこの夢に基づき豊作の収穫物の貯蔵と不作と飢饉にたいする対策を示した。ファラオはユースフの提言に大変感服し、ユースフを大宰相にとりたてて国政を一任することにした。ユースフがファラオの宮殿に迎えられ、大宰相として廷臣や民衆の尊敬を集めるようになると、昔からの宰相アジーズはすっかり面目を失った。

老いたアジーズはこの不名誉な状態に耐えられなくなり、それがもつて気力も体力も衰えて結局死んでしまった。アジーズがこうして死んでしまうとゾレイハーはもはやアジーズの館には住んでいられなくなった。ゾレイハーはとある陋巷にある廢屋に移り住んだ。そこでユースフを恋焦がれるあまりに犯した罪についての悔恨とユースフへの追慕にふける生活を始めた。ゾレイハーは幾年もこのような落魄の生活を続けて、すっかり容色は衰えしまっていた。それでもユースフを恋い慕い、ユースフとの苦い別れを思い起こしては毎日涙に暮れる生活をしてきた。さらに、ゾレイハーはユースフを求め続けて、ユースフの消息を求め続けた。ゾレイハーのもとへユースフの消息を知らせにくる者たちにはお礼の金銀財宝を与えた。やがてゾレイハーはすっかり貧乏になってしまった。このためゾレイハーのもとへユースフの消息を伝えに来る者もいなくなった。極度に貧しくなり失明までしてしまったゾレイハーはそれでもユースフの動静を知りたいためにユースフがファラオの宮殿に通う大通りの傍らに建てたみすばらしい葦小屋に住むことにした。ユースフの煌びやかに飾られた馬車がファラオの宮殿に向って進み、ゾレイハーの葦小屋の前を通った時に、ゾレイハーは小屋から出てユースフに呼びかけた。しかし、人々の喚声と馬車の

音、楽隊のラッパの音に彼女の声はかき消されてユースフの耳には聞こえなかった。落胆したゾレイハーは小屋に戻り、安置してあった偶像が助けにならない無用のものであると偶像を罵り、石を投げつけて壊してしまった。その翌日にゾレイハーは小屋の前を通り過ぎるユースフに唯一の純粹存在の名を唱えながらユースフに呼びかけた。すると通りの喧騒にもかかわらずゾレイハーの声はユースフの耳に届いた。ユースフはその声の主を知りたいと思家臣に自分に呼びかけた者を連れてくるように命じた。家臣たちは腰の曲がった盲目の老女を連れてきた。みすぼらしい盲目の老女になってしまったゾレイハーだったがユースフの前に出ると喜びのあまり自分のユースフに対する愛の心の旅路を告白した。ゾレイハーの話聞いたユースフはその老女がゾレイハーであると知った。そして、ユースフが「ゾレイハー」と呼びかけると、その言葉だけでゾレイハーは喜びのあまり失神したほどであった。気を取り戻したゾレイハーにユースフは彼女の身の上に何があったのか、今、何が欲しいかと訊ねた。ゾレイハーはこれまでに身の上に起こったことを語り、今、自分が欲しいものは二つあり、一つはかつてユースフが認めてくれた若さと美貌をとりもどすこと、二つ目は愛するユースフを見るために目が見えるようになることと言った。するとユースフはゾレイハーの願いが叶うように祈ると、ゾレイハーの曲がった背中は糸杉のようにまっすぐになり、以前にもまして若やいで美しくなった。美しくなったゾレイハーを見たユースフはほかに欲しいものはないかと彼女に訊ねた。するとゾレイハーは「私の唯一の希望は貴方と仲むつまじく暮らすこと」と答えた。そのとき大天使ガブリエルが現れてユースフにゾレイハーの望みを実現するようにすすめた。そこでユースフはゾレイハーの希望を受け入れ、盛大な婚礼の宴を開き二人の結婚が成立した。初夜にユースフはゾレイハーがアジーズと一緒に暮らしながらも、処女を守り通したことを知った。この初夜の床の二人の様子をジャーミーは愛する者たちへの慈しみの眼差しで優美に描いている。

ユースフが孔の穿たれてない宝石を見て、その庭からまだ開いてない蕾を摘んだ。

ユースフはゾレイハーにこの宝石はどうして孔の穿たれぬままなのか、薔薇は夜明けの風でどうして開かなかったのかと問うと、ゾレイハーはアジーズの大臣のほかには誰も知らぬが、かの大臣は悲しい蕾を摘み取ることはなかったと言った。⁽⁹⁾

ユースフとゾレイハーの二人は結婚後、永く平穏な愛の生活をおくり子供たちにもめぐまれた。ユースフとゾレイハーはともに年を重ね、やがてユースフはある日、自分の死期をさとりゾレイハーとの永別の日を迎えた。ユースフが死ぬとゾレイハーはユースフの埋められた墓所に行き、盛り土を自分の体で覆った。そのままゾレイハーは息絶えた。人々はゾレイハーの遺体をユースフの遺体の傍らに埋めた。

ゾレイハーのユースフの愛を求める努力とさまざまな試みは丁度、修行者が長期にわたって試行錯誤をくりかえしながら、最後にやっと真実在者なるアッラーにたどり着く様子を髣髴させる。ジャーミーはユースフへの愛ゆへに苦しみ、それでも愛をあきらめることなく、最後には愛の対象の中に飛び込むことに成功したゾレイハーを描いている。ゾレイハーはユースフへの愛に生き、愛の中に死ぬ純愛の女性として描いているのである。

3. バーズィゲ⁽¹⁰⁾の章について

ところで、この物語のなかのエジプトの姫君バーズィゲ Bāzighah の挿話は

(9) *ibid.*, p.727.

いかにも唐突な印象を与えるものである。バーズィゲの章をもう少し詳しく分析してみることにする。『ユースフとゾレイハー』は七十四章からなる叙事詩である。バーズィゲの物語の章は叙事詩の中ほどにあたる第三十章に見える。この第三十章に先行する第一章から第二十九章までの中にバーズィゲの登場を予想させるような記述は見当たらない。また第三十章に続く第三十一章から終わりの第七十四章の間にバーズィゲについて触れた詩句は見えない。つまりバーズィゲの章はまことに唐突に書き込まれているのである。バーズィゲの章は他の章の詩形と同じく二連一行の詩句で九十行からなるものである。『ユースフとゾレイハー』の主題の展開の流れから見て、著者のジャーミーはまったく気まぐれにこの章を書き入れたのではないかという疑問を読む者に抱かせる。バーズィゲの章の概要は前記の『ユースフとゾレイハー』の物語のあらすじにおいて紹介した。しかし、この物語が持つ意味をもう少し詳しく知るために、この章について詳しく考察をして見ることとする。

この第三十章は「富と美貌では比べるもののなく、アード⁽¹¹⁾の家系に属するバーズィゲという名の娘が密かにユースフの美貌に恋をして、その鏡の中に真理の美を見て、比喩から真理に至る物語」という長い章題が掲げられている。そしてこの章の始まりは：

愛はただ見ることで芽生えるわけではなく、しばしばこの至福は噂話からも芽生える。

(10) アラビア語の語根 b.z.gh (太陽が昇ること、明るくなること、姿を見せること) から造られた名前である。各種のスーフィー女性聖者列伝の中に該当する人物を見出せないからジャーミーの創作した人物であると考えられる。

(11) 『コーラン』7:63 (65) 以下何度も言及される古代アラビアにいた伝説の民の名前。預言者フードが使われたが、大多数の者たちはその言葉を信じなかったために滅ぼされたという。ここにいうアード族が『コーラン』に見えるアード族と同一であるか否かは不明である。

美の煌めきは耳の道からも入り込み、魂から静けさを、心から理性を奪い去る。

美少女の美しさを物語る恋の仲介者も、これ以上の仕事をすることはない。目で見ても密かに人を恋い慕わせる効果を齎すものとは限らない。

さて、エジプトに見目麗しき乙女ありき、アード一族の高貴の血筋なり。その紅玉の小箱から笑みが零れると、その笑みの優しさに国中が優しさに満ちる。⁽¹²⁾

この詩句からバーズィゲもまたゾレイハーに劣らぬ美貌の娘だったことがわかる。

天女も羨む美貌は世界を沸き立たせ、その微笑の美しさにエジプトは混乱した。

王国の貴顕らは彼女に恋焦がれ、町の若者たちはその美貌の娘に夢中だった。

されど、その美女のティアラは蒼穹を撫でて、だれも彼女に相応しくなかった。

莫大な富と比類なき格式の高さのゆえに、彼女はどの男にも目もくれなかった。⁽¹³⁾

とバーズィゲの様子が説明されている。彼女は絶世の美女であり、しかも気位が高く、誰か男に心を寄せるなどと言うことはなかったのである。ところが、ユースフの美男ぶりの噂を聞いて、バーズィゲはユースフをぜひとも見たいと思いはじめた。そしてユースフの噂を聞けば聞くほどに、彼を自分のものとした

(12) *ibid.*, p.750.

(13) *ibid.*, p.750.

いと思うようになった。バーズィゲは自分もっているありったけの金銀財宝を揃えて、ユースフを買うことを思いついたのである。そして彼女はエジプトの首都へと向かった。そしてユースフを見たときあまりの美しさに気を失ってしまうほどだった。しばらくして意識を取り戻すとバーズィゲはユースフを質問攻めにする。

おお、美しき技にて作られたる者よ、この汝の美しさは誰が為せる技か？
汝の額に太陽を輝かせたのは誰なのか？ 誰が月の光輪を揉上げに集めたのか？

いかなる絵師が化粧を仕上げたのか？ いかなる庭師が糸杉の姿を仕上げたのか？

誰が製凶器でその見事な眉を描いたのか？ 誰が汝の髪の毛を波打たせたのか？

汝の瑞瑞しき花はいずこより水を得たるものか？ 誰がその庭に水を与えしや？⁽¹⁴⁾

.....

このようにバーズィゲは次々と立て続けにユースフへ質問を發する。バーズィゲはユースフの美しさに驚嘆し、一度は呆然自失するのであるが、そのままユースフの美しさに魅了されてユースフへの恋の虜になってしまうのではない。その点がバーズィゲとゾレイハーの違うところである。なぜそのようにユースフが美しいのかを問いかけるのである。それらの質問はユースフの美しさの原因を突き止めようとする探究心の強さを示している。その質問は二連一行の詩句で十一行に及ぶ、ここでは冗長に成るからそのうちの五行だけを紹介

(14) *ibid.*, p.751-752.

するに止めた。この五行からもバーズィゲが知的好奇心の旺盛な聡明な女性であることが判明する。ジャーミーはバーズィゲをそのような女性として描いたのである。

このバーズィゲについての人物描写はゾレイハーのそれと比較すると対照的である。ゾレイハーはユースフへの愛と執心からさまざまな失敗を繰り返し、自分の人生を破滅寸前にまで追いやってしまうような、いわば愚かな女性として描かれている。ゾレイハーはユースフへの自分の愛が届かないもどかしさに怒り、自分の守護神である偶像に石を投げつけて偶像破壊をおこなってしまう。これは偶然の行為であるが、それが幸いしてゾレイハーは愛するユースフと同じ信仰の道に入ることができたのである。その結果、ようやくゾレイハーはユースフとの愛の実現にこぎつけることができたのである。ゾレイハーがもっと早く、ユースフに自分の愛が受け入れられない原因について考察し、自分の信仰と習慣を捨ててユースフと同じ信仰の道に入っていれば、ゾレイハーはあれほどの苦労を経験することなくユースフの愛を自分のものとすることができたはずである。ゾレイハーはその恋、その愛のために知性を曇らせ、ユースフを求めてもがき苦しみながら、偶然に救われてその愛を成就する。

これに対してバーズィゲは、最初はユースフの美しさに魅了され、ユースフの愛を求めるが、その知性を働かせてユースフの美の原因を追求する。それについて、ユースフは次のように答え、またバーズィゲを諭す。

我はかの造物主の造りしもの、造物主の大洋の一滴の水滴。

蒼穹も造物主の完成の筆による点にすぎず、世界は造物主の美の新芽にすぎぬ。

造物主の英知から太陽は輝き出でて、その権能の大海において大空は一粒の泡。

その美はいかなる欠点とも無縁であり、神秘の御簾のうちに隠れている。

世界の粒子の一つ一つを鏡となして、自らの顔を一つ一つに映し出した。美しきものを見たならば御身の慧眼にて、かの造物主の反映を見るがよい。反映を見たならばその根源へと急ぎ行け、そこにはもはや反映はないのだから。

神よ！助けよ、根源から遠ざかることなきように、反映が消えれば光を失うのみ。

映る影にはさほどの持続はなく、花の色にはさほどの誠意はない。

永続を望むなら根源に目を向けよ、誠意を求めるなら根源へと進め。

ものの悲しみは心を掻き奪る、それは一瞬に生れ、一瞬にほろびるものだから。⁽¹⁵⁾

ユースフはこのようにバーズィゲに諭す。このユースフの存在の哲学を聞いたバーズィゲについてジャーミーは次のように描写している。

存在の玄義を聞いた聡明な少女は、ユースフへの愛の敷布を巻き納めた。⁽¹⁶⁾

ジャーミーはバーズィゲを「聡明な少女」*dānā dokhotar* と形容している。バーズィゲはユースフの話聞くまでは、ユースフへの愛の虜になっていたのだが、その愛は真実在者への愛、すなわち真の愛 *'ishq-i ḥaqīqī* ではなく、真実在者の影への愛、すなわち比喩的な愛 *'ishq-i majāzī* の虜になっていたのである。そして、バーズィゲはユースフの真実在者の美と仮象の美の関係についての説明を聞いて真実在者の美を求めることの重要性を悟るのである。すなわち、仮象の美を愛する比喩的な愛よりも真実在者の美を愛する真の愛を求めることを選んだのである。

(15) *ibid.*, p.752.

(16) *ibid.*, p.752.

この秘密の扉が開かれた今、貴方への愛は比喩の愛だったことがわかる。私の目が真理に対し開かれた今、比喩にすぎないものへの熱愛を棄てるのが良い。

私の目を開かせた貴方に神の恵みあれ！貴方は魂の魂と私に密約を交わさせた。⁽¹⁷⁾

かくしてバーズィゲは自分を真理の道に導いてくれたユースフに対する感謝を胸にしなが、ユースフに別れを告げた。そしてナイル河の畔に小屋を建てて住むことにした。貧しいものたちに財産を分かち与え、一切を放下して、ひたすら真実在者への献身の生活を死ぬまで送ったのである。ジャーミーはバーズィゲの生涯を賞賛している。

それを虚しい生涯と思うなかれ、最愛の面立ちの輝きを見て死んだのだから。

我が心よ、この女性から潔さを学べ、その哀悼の仕方に悲しみ方を学べ。⁽¹⁸⁾

バーズィゲの潔い執着の断ち切り方にジャーミーみずからが感動している。バーズィゲは正しいと判断したことを即座に実行する気風の好い女性である。この引用の第二行の前半句に見える「潔さ」という言葉には原文では *mardānegī* (もともとの意味は「男らしさ」という語が用いられている。女性にたいしてこの単語を用いるのは奇妙に響くのだが、真実在者の認識を目指す修行の旅「セイル・オ・スルーク (*sayr o sulūk* 精神的巡歴旅行)」の旅人は性を超越した存在であると考えているからこの単語を使用しているのである

(17) *ibid.*, p.753.

(18) *ibid.*, p.753.

う。文脈上は日本語の「潔さ」が相応しいと思えるのであえてこう訳した。

結び

ジャーミーはゾレイハーとの対比のためにバーズィゲという少女を登場させている。ゾレイハーは美男ユースフへの想いを断ち切れず、徹頭徹尾ユースフを追い求め、その過程で一切を失い零落の極地に陥り、その挙句の果てに偶然にも「間違った信仰」から目覚めてユースフの一神教に入信し、その結果ユースフに愛を受け入れてもらえたのである。バーズィゲはユースフを愛するがユースフに「真の愛」について諭され、その教えを即座に理解し真実在者への愛と献身と奉仕の生活を送ることを選び、生きながらにして「最愛の面立ちの輝きを見る」のである。「最愛の面立ち」とは『コーラン』にいうアッラーの「お顔」⁽¹⁹⁾を指していることはいうまでもない。これはバーズィゲが生きているうちに真実在者との出会いを経験したということの意味している。このことはバーズィゲがアッラーの「招き寄せ」*jadhbah*を得たということの意味している。これにたいしてゾレイハーは試行錯誤と苦勞の果てに愛するユースフと結ばれることになっている。しかしゾレイハーは生きている間は真実在者の美の化身であるユースフとの愛の生活に到達するのであるが、真実在者そのものとの出会いを経験しているわけではない。それゆへ、ゾレイハーのユースフへの愛は最後まで比喩的愛であったというべきであろう。しかしながら、ゾレイハーのユースフへの愛はこの仮象の世界に生きる人間が経験するかぎりでの至福の愛を経験していると見ることも出来るであろう。ゾレイハーが最後に到達した愛は比喩的愛とはいえ真の愛によって得られる幸福の極地に限りなく近いものである。

ジャーミーはゾレイハーの生き方もバーズィゲの生き方も肯定している。

(19) 『コーラン』第2章115 (109) など。

ジャーミーはバーズィゲに聡明さと宗教的才能を与えている。バーズィゲはいわば宗教的天才である。ゾレイハーはそのような聡明さや天才とは無縁な女性であるし、また宗教的才能にも恵まれない、むしろ愚直な人物として描いている。ただ、ゾレイハーはユースフに対する愛に突き動かされて悩み、苦労を重ね、失敗を続けながらも、最終的には苦悩と失敗と苦労により浄化を経験し、浄化された比喩的愛を成就させる。ジャーミーはゾレイハーを書くことにより、ごく普通の人間の愛が到達しうる極限を示したといえるであろう。ジャーミーは叙事詩『ユースフとゾレイハー』においてゾレイハーをヒロインとしている。それはジャーミーに試行錯誤の繰り返しの末にこの世的幸福に到達するような普通の人間に共感する感情があるということを意味しているといえるであろう。